
IS インフィニット・ストラトス～異能者の一夏

ランサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラatos 異能者の一夏

【Zコード】

N13610

【作者名】

ランサー

【あらすじ】

高校に行かず自分の姉の反対を押しきり日本軍に所属した……人の少年……彼の名前は織斑一夏、彼はブリュンヒルデの称号をもつ織斑千冬の弟であり、そして彼も日本軍最強のAT乗りとして、軍の間で噂になっていた……そんな彼の世界が変わる……これは原作の一夏と全く違います、それが嫌ならリターンしてください。

それと原作一夏と違い彼は一つ年が上です。

プロローグ（前書き）

この話の単語で疑問に思つたら短いですが後書きを見てください。

プロローグ

インフィニット・ストラトス……通称……IS、この兵器が世に出
て十年、世界の軍事バランスは一気に崩れ戦闘機、戦車などの兵器
は、もはや時代遅れの兵器とかしてしまった。それに歯車をかける
ように、始まつた女尊男劣の時代きた、理由は最強とも言えるIS
は女性にしか扱えないからだ、その理由が決定だとなり、今はそん
な時代が始まり、世界のあらゆるバランスが崩れた……しかし、俺
に関係はない……俺は兵士だ……兵士に世界のバランスなど政治な
ど、関係はない俺は与えられた任務を遂行する、ただ、それだけだ。

とある日本軍基地……。

日本の基地で、一体の鉄の塊がついている人型の機動兵器が、高速
に走り……そして白い的に、自信のアサルトライフルで狙いを定
めて、そして、銃口から鉄の雨が振り注ぎ、白い的に、叩き込まれ、

そこに高速で通過する……機動兵器は……カラーリングは緑色に染まって、そして三種類の工学レンズがついており、ISとはまた別の兵器の一つ……。

その名はAT呼ばれる人型機動兵器、ATとはアーマード・トランパーの略であり、ISとは全く別系統から産まれた、機動兵器だ……しかしISと比べると安全性など全くなく、なにより機動力はISとかなり劣る、それはATは量産正を求めて作られた為に、死亡率はとにかく高くATは一般兵から『鉄の棺桶』とまで、言われている、しかしながらISがあるなかで、この兵器は採用される理由は……。

安全性を無視しても、量産制が高くなにより低コストで、ISには劣るが地上での高速な機動力を誇るためにある。

これが理由でATはいまだにISが戦場の主役にありながら、ATは配備されているのだ。

「…………ターゲットロックオン」

そして最後のターゲットに銃口を構え、狙いを定めて鉄の弾はターゲットに吸い込まれるように当たった。

そしてブザーがなり、彼のATのコックピットに声が響く。

『織斑一夏、伍長、訓練は終了だ格納庫に戻れ』

「了解した」

一夏は訓練の終了を聞いて、格納庫に戻つた。そしてATの膝が倒れ彼はコックピットから出で、ヘルメットを脱ぐ。

そこに一人の中年男性の整備兵に声をかけられた。

「よお、相変わらずスゲーな、若いの」

ガハハと笑い、一夏の肩をバシバシと叩く中年の整備兵だが、一夏は

「……大したことじゃない」

「いや、お前さんは大したもんだ、普通ならあれだけ、走らせて狙いを寸分の狂いもない射撃は普通なら出来ないぜ！！」

彼ら一人が喋っているなかで格納庫に一人ほど、彼らに近づく人がいた、もう一人は一夏より年上の二十歳前後の男性で髪型は黒髪の短髪で少しワイルド系であり、もう一人は十九くらいで黒髪のセミロングの女性であった。

「よお一夏、今日も調子が良いみたいだな！」

「見てたよ、やっぱ凄いね流石はブリュンヒルデの弟だよね」

「^{まこと}真に未沙か^{みさ}……それと未沙、俺は姉には遠く及ばない」

「なに言つてんのよ日本軍で最強のAT乗りの称号を持つてゐるのに、自分を軽視しちゃて」

『I-JのI-J』と肘を並べて一夏をからかう、未沙、しかし一夏は無愛想に彼女を退ける。

「もうーーうな無愛想だから、いつも上に睨まれるんだよー少しば笑いなよー一夏ー！」

「そりだぜー一夏、少しば笑らなきや人生そんそん、少しばパーと笑

「人は忠告するが一夏は彼らを無視して……。格納庫を去った。

「全くなんで一夏はいつも、あんな無愛想なの！？」

忠告したのに無愛想な一夏に怒る未沙。

そこを真がまあまあとなだめる。

「そんな事で怒っても仕方ないだろ、一夏の無愛想はココに配属された時からなんだからさ。」

「それでもだよ、一夏はまだ16だよー少しほ可愛げがあつても良いのにさー！」

「まあ、でも普通なら高校に通つても可笑しくない年頃なのにアイツの、あの表情と態度は以上だよな……なあとつあんはアイツの事、アンタなら知つてか？」

とつあんと呼ばれる中年男性、先ほど一夏に話しかけていた男性

であった。

「この中年男性はHURやRA-Tとあらゆる兵器の整備を担当して、この基地から…………『ヒツアン』、または『おやつさん』と呼ばれ慕われている。

「まあ、ワシも詳しくは知らんが、アイツが軍に入隊した頃は、あんな性格じゃなかつたみたいだ、まあ、この話はワシの知り合いから聞いた話だがな」

「じゃあ、何で今はあんな無愛想なんだよ、訳がわからんねーな」

「まあ、人間だれにも言いたくない過去の一いつや一いつはある、そんなに詳しく聞きたきや、アイツに聞くんだな」

中年男性は、そう言つて…………彼が乗つたATの点検を再開した……一人は、ハアと言つて格納庫を後にした。

二人に言われた事を、それほど重要に思つておらず、……そんな考えをやめてもう一つの格納庫を見つけて……ある物を見つけた。

(……今の俺には関係ない)

一 夏は一人に言われた事を思い出したが。

(笑えか……最後に笑つたのはいつだつたかな)

それは日本軍が現在、使用されるるIS……日本の第一世代型『打鉄』であった……一夏は思わず、この格納庫に入り打鉄を見つめていた。

(なぜ、打鉄がこんな格納庫にある?……ISならもつと重要な所に配備されるはずだが?)

ISがこんな無防備に置かれている事に、彼は疑問に思つて彼は思わず……打鉄を触つた……すると彼はある違和感を感じた。

「なんだと!」

彼は思わず叫んってしまった……そう彼はISに触れた途端に、ISの操縦方法や性能、特性……ありとあらゆるISの情報が一夏の頭に流れてくるからだ。

そして一夏は……。

(「マイツは……動くー。）

そしてISは光、そして彼は打鉄を装着していた。

「なぜ……。俺がISを操れるんだ」

一夏は疑問に思つた時であつた。

「おい、なんか光つたぜ……て、一夏！ー！」

「うそー！なんで一夏がISにーー！」

何故か真と未沙が……。格納庫に……いて今の状況に畠然としていた。

「ねえ……一夏君……君つて女の子だったの？」

思わず真が……苦笑いしながら一夏に聞いてみたが。

「俺は、男だ」

「デスよね～」

その後、基地は大騒ぎになり、女性にしか動かせいと思われていたISを男が動かした事により、基地全体がパニックなり…………その後、軍は混乱をさけ情報規制を使用としたが、何故だか一夏がISを動かした事が全世界に広まっていたのだ……それから一夏の世界は変わろうとしていた。

プロローグ（後書き）

インフィニット・ストラタスの世界に日本は自衛隊なのかは、わかりませんが独自の設定で日本軍としました……。

人物紹介1（前書き）

オリジナル人物、または主人公紹介です。

人物紹介1

織斑一夏

年齢は16歳で、軍の階級は伍長、自分の姉 織斑千冬の反対を押し
きり、高校に行かず軍に志願した……入隊したての時は無愛想な性
格ではなく、明るい少年であつたが、あるきっかけが原因で心を閉
ざして、無愛想な少年となつてしまつた。この理由は話が進むに連
れてわかります。反対を押しきり軍に入隊したが千冬との連絡はと
つていて……。ATの操縦能力は高く、日本最強のAT乗りと軍の
間で噂されている、因みにいろいろなATを操縦できるがドック系
のATを好んで乗つっている。

原作と違い一つ年が上である。

神崎 真

年は二十代前半で、日本軍のヘリパイロット、階級は少尉。

彼が所属する基地に一夏が配属された時に無愛想にしている一夏に
声をかけたが、一夏に無視されたが、しつこいくらいに声をかけた
人物、一夏が数少ない軍の知り合いとなる。

性格は明るく、おひやられた態度は崩さないマークメーカー的な存在である、一夏を弟を見ている感覚で接している。

愛川 未沙（あいかわみさ）

年齢は19歳……日本軍のI-S操縦者……階級は中尉、性格は普段は明るいがいざといふときは、自分の信念を曲げない強さを持つている……一夏が基地に配属された時にいつも無愛想にしている所を指摘した事があつたが、一夏は無視をして、最初は上官として彼を叱つたが、やつていくうちに彼を弟をしかる感覚で彼を注意して、真と同じように彼を心配するようになる。

真と同じで一夏の数少ない軍の知り合い。

とつあん（またはおやつわん）

本名は不明だが、I-SやATなどの兵器の整備の高さは基地の皆が認め、基地のみんなからとつあんまたはおやつさんと呼ばれて慕われている。

整備兵としても優秀だが、裏のルートの情報源もあり、色々な情報をしつてこる。

HIS学園（前書き）

文章力がほしいです！！

ダメ文続きですがよろしくお願ひします。

俺がIISを扱える事が知られるようになり、当初、世界は混乱していた無理もない……この十年でIISを扱える男性など一人もいなかつたからだ。『IISは女性にしか扱えない』と言う認識が崩されたのだ、その事実が発覚した時は世界中が特番のニュースで、俺の話題で持ちきりだった。

ニュースだけではなく、世界各国の記者やテレビ局が基地に詰めよつたのだ……。俺は上から最低限の質問に答えると言われその指示にしたがつた。それから時間が立つにつれて、記者やテレビ局の足は收まり、テレビ局や雑誌の記者などに追われる事は少なくなつた。これで終わりと思ったが、それでもない俺は日本政府から『IIS学園』に通えとの命令が来たのだ。

理由は簡単だ、俺は軍人とはいへ、世界で初めて男性のIIS操縦者となつたのだ、それは世界のアピール材料にも繋がるが、他にも世界各國が男性IIS操縦者のデータを欲している、日本政府は俺が世界各國の人間が俺に手出しが出来ないようにIIS学園に通わせようとしているのだ、それに俺の年齢は高校に通う年齢だ、それならIIS学園に通つても問題ないと判断したのだろう。

そして俺はIIS学園に通つ事になつた。

「…………。」

I.S学園に通う事になった一夏は静かに決められた席に座っていた、そしてクラス内は沈黙に包まれ、何より女性の視線がほぼ、一夏に注がれているからだ、何しろクラス内は一夏を除く皆が女性なのだ、席は真ん中で最前列に彼の席があるのだ、それは嫌でも目立つ。

「全員揃っていますねー。それじゃあS.H.Rはじめますよー」

黒板の前に微笑み一人の女性、少し子供っぽい感じがする、高校生ですと本人が言つても通用する幼い感じがしていた。

このクラスの副担任の山田真耶先生である。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね

山田先生はクラスの皆さん挨拶するが一夏を除くクラスの皆が変な緊張感が漂い、返事が帰ってきて来なかつた。

何より副担任の山田先生の話より視線のほとんどが一夏に、向けられているからだ。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号で」

クラスの反応にうろたえる山田先生だが一夏は、そんな山田先生の対応やクラスの目線を気にせず、ある事を考えていた。

(「IJJが……IS学園……俺以外が女性なのは変な違和感を感じるが……まあ時期に慣れるか）

自分の現状を確認していた一夏、そして自己紹介が一夏の番になつた。

「織斑一夏君、自己紹介をお願いしますね」

一夏の番になり一夏が席を立つとクラスの皆の視線が一夏が自己紹介する前の他の女性の自己紹介より視線が集中した。

「日本軍、関東方面基地所属、第65連隊装甲騎兵団所属の織斑一夏伍長だ、日本軍のAT乗りだ、ISに關してはあまり詳しくは知らないが、皆の迷惑にならないように善処するつもりだ、君たちと一年ダブっているがよろしく頼む」

自己紹介が終わり席につくと、女子達が「うわ、年上…」「お兄様！」「私を守って！」などいろいろと聞こえるが一夏は気にせず席に座った。

席に座つた時にある別の視線を一夏は感じて一夏は振り向いた。

その人物は篠ノ之箇…………。一夏の幼なじみである。

(箇か…………余るのは六年ぶりだな)

一夏がそんな事を考えていた時に教室のドアが開く音が聞こえた。

「あ、織斑先生。もう会議は終わつたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

副担任の山田先生と話す一人の長身の女性、黒のスーツに鋭い目付
きは一夏にそつくりであった。

彼女は一夏のただ一人の肉親である織斑千冬であり、IS最強の称号であるブリュンヒルデの称号をもつ人物でもある。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言つことは聞け。いいな

暴力発言とも言えるが、反対する生徒はいない逆に黄色い声が教室に響いた。

「キヤ――――千冬様、本物の千冬様よ――」

「ずっとファンでした!」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです!北九州から!」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです!」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

キャーキャーと騒ぐ少女達に千冬は呆れた表情で咳く。

「…………。毎年、よくこれだけ馬鹿者が集まるものだ。関心をせら
れる。それとも何か？私のクラスだけ馬鹿者を集中させているのか
？」

「ああああああーーーお姉様ーーー黒いーーー」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように賭をして〜！」

更に黄色い声が響き、千冬はさらに呆れていた。

そんな時に千冬が一夏に近づき…………。

「お前はもう少しまともな挨拶が出来んのか」

「…………。」

実の姉である千冬に、されるが一夏は…………沈黙していた。

「返事はどうした?」

「すまない、姉」

一夏がいいかけた瞬間に出席簿で叩かれそうになるが一夏は右腕で反射的に止めた。

「流石だな…………それとここでは織斑先生だ」

「了解した」

この会話が聞こえクラスの女性達がザワザワとしていた。

「え…………？ 織斑くんって、あの千冬様の弟…………？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『HIS』を使えるのっていうのも、それが関係して…………」

「ああつ、いいなあつ。代わつてほしいなあつ」

千冬の弟であり一夏に羨ましい感情が一夏に刺さると一夏はここでもか、心の奥底で呟いた。

そう彼女らは、織斑一夏と言う人物を認めておらず、織斑千冬の弟しか見ていないのだ……これは一夏が軍隊にいた時も同じだつた、軍隊にいた時もほとんどの人物に『織斑一夏』を認められなかつたのだ……

そう一夏は感じていたことも、軍隊に所属していた時と同じで織斑千冬の弟としか一夏は認められなかつたのだ。

それから授業が始まり一夏はISの基礎理論を受けりしていた普通、日本の高校なら入学式の当日に授業はないが、ここIS学園は別であつた、IS学園は世界各国から生徒が集まる何より将来は自分の防衛の要かもしくは、IS企業の社員にもなる、そのためIS学園は軍隊学校の色が強い。ISの基礎理論の授業が終わり休み時間、一夏は基礎理論の復習をしていたISの基礎的な知識は、ここに入学する前に軍隊でみっちりとやつていたが、しかし……クラスマートの皆と比べると一夏はISの知識の密度は薄い。

もともと一夏はたまたまIISを機動させてしまったのだ、最初からIIS学園に入学する生徒と比べると一夏の知識は薄いのだ。だから一夏は少しでも基礎を頭に叩き込みいつでも、実技に出ても問題がないように復習をしていた。

しかし復習をしている一夏だが一夏は少しうんざりしていた、クラスメートの視線で話しかけようにも話しかけようとしない変な緊張感、しかも一夏を見ているのはクラスメートだけではなく、他のクラスの女性や一年、三年の先輩が廊下から一夏を見ているのだ。話をかけよにも男性になれないのか話をかけよにも、最初の一歩が踏み出せないでいた。人間だれしも最初に飛び出す事はなかなかしない。

一夏は女性達を無視して復習の続きをやるひつとしていた時であった

……。

「…………。ちょっといいか」

声をかけられ振り向くと一夏の幼なじみの篠であつた、肩から腰まで伸びた長いポニーテールになりより身長も他の女性と同じに思えるが、何故か長身に見えてしまった。

「…………なんのようだ？」

一夏は短く答えた、箒の視線が鋭くなり怒りのこもった視線で一夏を睨み付けていた。

箒は『ついてこい』と一夏に言い一夏も断る理由もないのに箒に着いていった、一夏は少し箒に感謝していた居心地が悪い教室から出るきっかけ作ってくれたのだ、自分をまるで動物園の動物を見るような視線で見てくる女性にうんざりしていたのだ。

教室から出た一夏と箒は校舎の屋上に来ていた。

「…………一夏、一体なにがあった

「…………。」

箒に真剣な表情で聞かれるが一夏は答えない。

「答えるー何故、あんな冷たい目をしているーそれに軍隊に入つていただとーどうこう事だー！」

一夏の制服の首根っこを掴んで詰め寄るが、一夏は……。

「…………お前に関係ない」

「関係ないなどあるか！！」

一夏が無表情に答える 篠は怒りを押さえきれないでいた。

「 篠…………。 一つだけ言つておく」

一夏は、 静かに篠に答える。

「お前の知っている織斑一夏は死んだ、 今の俺は…………ボトムズだ」

「…………？」

先ほど感じださうに冷たい 一夏の視線に篠は先ほど怒りが氷ついてしまい、首根っこを掴んでいた手を離した。

そして学園のチャイムがなり 一夏はその場を去った。

「一夏……。」の六年間で何があつたと言ひのだ。」

鷲は一夏の後ろ姿をただ見つめてゐることしか出来なかつた。

イギリスの代表候補生（前書き）

セシリーアフアンの皆さんにはキツイと思います、それと「これから一夏はあまり周りからイチャイチャされません。

イギリスの代表候補生

一時間目は授業同様、二時間目もEIS関連の授業であった。既に重要な事はノートに書いて一夏も重要と思った事はノートに書いていた。

「…………先生、すいません」

「はい、何ですか織斑君？」

一夏は静かに手をあげて山田先生に質問した、山田先生も笑顔で一夏の質問に答える。

「…………」の意味を教えてください」

「はい、そこはですね……」

自分でわからない所は先生に質問して、真面目にノートに書く一夏に山田は関心していた、山田先生は少し一夏に苦手意識はあった、男性に触れ合う機会は、なかつたのもあるが、それ以上に一夏は無愛想であまり表情を変えないからだ。

「……ありがとうございます」

「いえ、またわからない事があつたら訊いてくださいね！」

一夏は表情を変えず静かに礼を言いい山田先生は笑顔で黒板の所に戻った。

それから授業が終わると、一時間目の休み時間に授業で受けた所の復習をしていた。

「ちょっと、よひしきて？」

金髪でわずかにロールが、かかつた髪をしており、貴族のご令嬢な感じの女性であった。しかし一夏は無視してノートを写していた。

「訊いています？お返事は？」

「…………」

一夏は相手にせず、黙々と復習をしていた。

「ちよつと無視しないでくださいーー。」

「……なんだ」

一夏はうんざりした感じで話をかけた。一夏はこの手のタイプは基本は無視する事に決めているが、授業で受けた内容を復習をしているなかで話をかけられては邪魔で仕方がないので話にのつたのだ。

「まあ！何ですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「悪いが俺は、お前の相手をしてる暇はない」

一夏は、それだけ言ってノートを書き続けた。

「何ですのーーこのイギリス代表候補生であるセシリア・オルコットに向かつてなんて態度ですのーー。」

「……失せろ、復習の邪魔だ」

セシリ亞はいかにも一夏を見下した態度で喋るが、一夏はセシリ亞の態度に鬱陶しさを感じていいためか、そう言つた。

「やはり、ボトムズ乗りは品格がないですね、男で唯一 I.S. が扱えると思ってきや期待はずれですわ」

セシリ亞の言ったボトムズ乗りとは A.T. 乗りの事を指す、A.T. は『鉄の棺桶』と言われるくらいに搭乗者の生存率が低く何より気象が荒く命知らずな連中が多いためか、A.T. 乗りの事をボトムズ乗り、とも言われる。

「まあ、私は優秀で代表候補生ですから、貴方のよつな人間にも優しくしてあげますわよ」

セシリ亞の態度にとても人を教えるが勤まる人間には思えない一夏であつた。

「I.S. のことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですか？」

「…………教官なら俺も倒したがな」

自分が教官を倒したと優越感に浸っていたセシリ亞だが一夏の言葉にセシリ亞は固まった。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「…………女性だけなんじゃないのか」

一夏の冷静な言葉にセシリ亞は一夏を睨み付けた。

「…………そなありえませんわ！男のアナタに、いいの教官が倒され
るはずはありませんわ！」

「…………俺が言つた事は史実だ、少しは現実を受け入れたらどうな
んだ」

セシリ亞の言葉に一夏は呆れて口調で呟いた。それを聞いたセシリ
アは更に一夏を睨み付けたが……。次の授業のチャイムが鳴った。

「お、覚えてなさい！」

セシリ亞は納得がいかない表情でさり一夏は次の授業の準備をはじ
めた。

次の授業では山田先生ではなく、一夏の姉である千冬が立っていた。

「ああ、その前に再来週の行なわれるクラス対抗戦に出る代表者を決めとかないといけないな」

千冬は向やう思つて出したよつに広く。

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会の出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

千冬の説明にクラスメートはざわつき始める、一夏は自分には関係ないと思つが話だけ聞く事にした。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

一夏は自分が推薦された……一夏は、学園に一人しかいない男をクラス代表にしたほうが面白いと思い推薦したんだろうと思っていた。

「待つてくださいー納得がいきませんわ！」

一夏の推薦に納得がいかなく、セシリアが席を立ち抗議をした。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわー！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですが！？」

セシリアの怒濤の剣幕は止まる事がなかつた。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までEVA技術の修練に来ているのであって、サービスをする気は毛頭ございませんわ！」

「…………イギリスの代表候補生と聞いて呆れるな」

一夏の眩さにセシリ亞は一夏に物凄い剣幕で睨み付けた。

「アナタ、私を侮辱しますの！極東の猿の分際で！－」

「俺は、事實を言つてるまでだ……こんな馬鹿を代表候補に推薦したイギリスの思考を疑うな！」

一夏の言葉が引き金となりセシリ亞の怒りが頂点に達した。

「わたくしじだけではなく……祖国まで侮辱するなんて決闘ですわ！」

机を叩きつけて一夏に決闘を申し込んだセシリ亞に……一夏は冷静に……。

「…………不本意だがいいだろ？！」

「そうですわ、わたくしは代表候補生ですから貴方とは実力がちがいますからハンデを差し上げてもよろしくてよ！」

「いらん……所詮 I S 同士の戦いは遊びに過ぎないハンデは必要ない」

その言葉にセシリ亞だけではなく一夏の実の姉である千冬も凄い剣幕で一夏を睨み付けた。

「今の発言はどういうつもりだ織斑！」

「…………。」

一夏は答えない、だが一夏の言った『遊び』の言葉に周りのクラスも先ほどアイドルを見る視線とは別の一夏に敵意を示す視線に殆ど変わっていた。

「もう許しませんわこのセシリ亞・オルコットが完膚亡きまでに貴方を叩きのめしてあげますわ!!」

これによりクラス代表決定戦が一週間後に決定した、しかしあの一夏の発言が元になりクラスメートは一夏と接しようとする女性はいなくなっていた。

だが……一夏は逆にこの熱氣のせつが居心地が良いとそれいけ思つていて、孤独なほうが良いと……。

回帰（前書き）

短いです

放課後……一夏は今日まで習つた授業の復習をするため、まだ教室に残つて勉強していた。ちなみに午前の発言が元になつたのか最初は一夏目当てにクラスに押し掛けた女子達もいなくなつていた。当然、彼女達はIS搭乗者としての誇りがある何より、一夏の『遊び』発言はIS搭乗者全員に喧嘩を売つた行為に等しいのだ。

そのため一夏は、アイドルみたいな視線は受けず逆に敵意を受けるはめになつたのだ。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかつたです」

一夏のクラスの副担任の山田先生が書類を片手に教室に入ってきた。

「なにか？」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

山田先生はそう言つて部屋番号の書かれた紙と鍵を一夏に渡した。

当然だがIS学園は全寮制なのだ、理由はIS学園は将来有望な人材を世に出す事を目的とする学園だ、そんな有望な人材が喉で

るほど欲しい各国の思惑から守るため全寮制にしてい、最も理由は全寮制にしないと生徒が行方不明、もしくは誘拐されたなどが起きる可能性が高いからだ、起きたら日本政府は各国から苦情は起きる、そのうえ日本の国際地位は下がり信用を失うからだ。それを危惧して全寮制にしているのだ、全寮制にすれば生徒を監視しやすいうえに学園内なら問題が対処しやすいからだ。

「確認、しますが一人部屋ですか？」

「えつと……。」

何や、言ごづらうのか一夏は尋ねた。

「もしかして一人部屋ではないと

「すいません、織斑君は事情が事情なので部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……織斑くん、そのあたりのことって聞いていますか？」

「いえ、初耳です」

実際にそんな命令は政府どころか軍からも一夏は聞いていない元々、

IS学園は男性がいない、緊急的に俺を相部屋に入れたんだろうと一夏は思っていた。

「そうですか……。でも1ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらく相部屋で我慢してください」

「了解した……。それよりも俺の荷物は何処ですか、確か軍からこちらに直接送つてくると聞きましたが?」

「私が預かっている、ありがたいと思え」

「お前の着替えと最低限の貴重品は部屋に送つておいたぞ」

45

「ありがとうございます 織斑先生」

一夏は冷静な口調でお礼を言い、教室を後にした。

一夏は一年の学生寮に入り自分の部屋番号を確認して歩いていた。
1021 1022 1023 と確認して自分の部屋を見つけた。

「……こじだな」

一夏はドアに鍵を差し込みが扉は鍵がかかつていなかつた。

一夏は疑問に思つたがとりあえず部屋の中に入つた。部屋には二つのベッドが並んでおり、下手なホテルよりは豪華な設備が揃つていた。

一夏は軍隊の寮とこの寮とは雲泥の差を感じた。

「誰かいるのか？」

奥のほうから声が聞こえる一夏は、この声に聞き覚えがあつた。

「ああ、同室になつた者か。これから一年よろしく頼むぞ」

一夏はやはり聞き覚えがある声に一人の人物を連想していた。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使つていた。私は篠ノ之」

やはり一夏は、この声は自分が今日、再開を果たした自分の幼なじみの篠ノ之篇であった。

筈はシャワー室から出てきてバスタオル一枚しか羽織っておらず、そしてシャワーを浴びたばかりなのか湯気も出ており、同い年の女性にしてはティカイ胸を強調するように出ており普通に色気が漂っていた。

お互いに時間が止まり篭が……。

「い、い、いちか……？」

「...」

筈は答えるが一夏は答えず、腕を組み後ろを向き…………一夏は短く。

「……ついで服を着ろ」

「 / / / / / / / / ! ! 」

自分の格好に気づき篠は表情を赤くする、篠は直ぐに着替え一夏はそれまで後ろを向いていた、それから篠と一夏は互いのベッドに座り沈黙を保つていた。

「 「…………」 」

沈黙の空気が思い他の人がこの場にいたら空氣の重さに、その場を去ってしまうだろう。……その沈黙を破るよつに筈が……。

「い、一夏……聞いてもいいか」

筈が呟く。

「もう一度、聞きたいどうして軍隊に入った、それと何故あんな發言を」

筈の呟つた發言は一夏の『遊び』との言葉であることがわかる。

「答えてくれ一夏！この六年間に何があつたー以前のお前ならんな發言はしなかつたーー」

筈は真剣な表情で一夏にそりづけた。

「…………悪いが筈、答える事は出来ない」

「何故だ、何故なんだ一夏！私がそんなに頼りないのか！？」

「違う……」

今まで心を閉ざしていた一夏の言葉とは思えず、一夏は心の奥底から叫んだ。筈も一夏の声に驚いた。

「筈…………俺はお前を信用してないわけじゃない」

「なら、教えてくれ何故、お前がそうなったのかを」

「…………わかった、しかし」の話は軍の機密に触れる事になるそれを聞いた事がバレたらお前は軍に睨まれるが良いのか？」

「構わん」

一夏は真剣な表情で簞に語る。

「……俺は戦場で人を殺した」

一夏は語る、自分の過去を……。

回室（後書き）

一夏の過去を次回は話します、自分的には早すぎると思いますが……
……とりあえず過去話しに入ります。

—夏の過去（前書き）

こんなのは幕じやないと書いて、怒る人がいるならヒターンしてください。
さい、この幕は原作と違いますから。

一夏の過去

一夏が人を殺した、それが篠には、わからなかつた一夏は語る。

「俺が軍に入隊するきっかけは、姉貴に守られてばかりの自分が嫌いだつた、姉貴を守りたい、何より周りの皆を守りたくて俺は軍に入隊した、もつとも最初は姉貴に反対されたがな」

一夏は真剣な表情で語る、一夏の言葉に篠も真剣な表情で聞いていた。

「俺は入隊した時にAT部隊に配備された、俺は訓練の成績もそれなり高かつた、最初はATの操縦技術が高くなるにつれて俺は自分の強さを実感していた、そしてAT部隊で訓練して1ヶ月が立つた時に俺はある部隊に転属されたんだ」

「ある部隊だと？」

一夏の表情はさらに固くなる。

「俺はレッドショルダーに転属されたんだ

「なー?」

レッドショルダーとの言葉に篝は驚いていた。

「流石に驚いたか?」

「当たり前だ!あの吸血部隊にいたのか!?!」

吸血部隊……それはレッドショルダーのあだ名、レッドショルダーはかつて日本軍が誇る最強のAT部隊だ、当初は機密にしていたが時がたつに連れて一般にも部隊の公開をしたのだ。

「俺は最初はレッドショルダーに転属された意味がわからなかつた……ATの訓練を1ヶ月しか受けてない俺が何故なのかとな、いきなり転属されたのか疑問に思つても仕方ないと思い、俺はレッドショルダーの基地に向かい転属そうそうに模擬戦を行なつた、だがそこでおこなわれたのは模擬戦じゃなくて実戦だつた」

「!?

篝は一夏の言葉の意味が理解出来なかつた、模擬戦ではなく何故、味方の基地で実戦をやる理由が。

「後で知つたが、それは『共食い』と呼ばれる適性テストである事がわかつた、俺を含め転属した21名の隊員のうちの四人しか生き残れなかつたがな」

「ふざけるな！ 適性テストだと、ただの大量殺人ではないか！」

篝は当然のように怒る、人の命を軽く觀るレッドショルダーに篝は怒りを出す。

「篝……これは軍事機密だ、レッドショルダーの『共食い』の内容は軍の高官の一部と俺のようなレッドショルダー部隊での人間しかしらん」の事實を漏らすな、お前は軍に捕まるぞ……いいな

一夏は篝に厳命した。

「ああ、わかつた」

「なら、話を続ける俺はレッドショルダーの『共食い』から生き残り、俺はレッドショルダー隊員となつた、隊員となつた俺はそこで死者が出るほどの過酷な訓練を受け、そして2ヶ月が過ぎた時にレ

ツドショルダーは戦場に出された

「…………」

纂は自分が知らない間に一夏が、このような経験をしてる事に驚き黙ってしまった。

「纂…………第一次朝鮮戦争を知つてゐるか？」

「当然だ、あの戦争は日本も国連軍として参加してゐるんだ知らない訳がないだろ?」

この第二次朝鮮戦争、それは北朝鮮の首相が突然、他界してしまい独裁政治を行つていた北朝鮮の首相の突然の他界に北朝鮮政府は混乱し、それを軍が政府に反乱をおこしてしまい、軍が政権を握り昔からの敵対関係にあつた韓国に宣戦布告、これが第二次朝鮮戦争の始まりだ。

この事態に国連は朝鮮に軍隊を派遣することを決めたI.Sが世に出た時の初めての戦争として記録されてい、もともとI.Sが世に出た事により小規模な内乱はあつたが、国全体を巻き込む戦争は一切行なわれる事はなかつたのだ、それが突然、始まつた国を巻き込む戦争だ。

「この戦争に俺たちレッドショルダー部隊が参加した……。その戦争に俺たちは最前線に派遣された、そこはもう俺が体験した事もない狂気にあふれた場所だつた、肉片はあたり一面広がり、銃弾の雨が降り注いで死体の山がそこらじゅうに広がっていた」

筆は当時、テレビでしか戦争の内容を知らされておらず一夏のように直接、戦争に関わっていないのだから。

「そして俺は最初はためらいもあつたが人を殺した、殺さなきやこつちが殺されると思っていた、だんだんと殺していくうちに自分の感覚が狂つてくる事がわかり、俺はもうそこから人を殺したくないと思いためらつた、そんな甘い考えが原因で俺は仲間を殺した、そいつは俺と同じように転属された時からのパートナーだった、俺はもう殺したくないと思った時に隙ができ、俺の仲間が身代わりに敵の攻撃をくらい死亡した」

一夏は表情を変えないが悲しい日になつてゐる事が筆にはわかっていた。

「そこから、俺は自分の甘さを憎んだ、自分に甘さがあつたせいで仲間を死なせたと思い、俺は機械になる事を決めた、もう誰も殺させない感情を捨て仲間を作らない、そうしなければ俺はまた犠牲者を出すと……これが俺の経歴だ」

一夏の経験に筈はただ聞いてることしか出来なかつた。そして一夏は……。

「俺は……お前に過去を教えた、だが俺はこれからも仲間を作らないし感情で動く事もしない、これからも俺は周りから敵を作るだろ、だから筈、俺とお前の関係は、こ「ふざけるな！」筈？」

筈は突然、怒鳴つたそして一夏を頬をひっぱたき、その音が周りに響いた。

「仲間を作らず、感情を捨てるだと…お前はいつからそんなに弱くなつたんだ！」

一夏は……筈の言つている意味を理解出来なかつた。

「一夏……。お前が戦争で辛い経験をした事はわかつた、だが感情を捨ててしまつたらお前はただの人形だ！」

「人形でも良い筈……。いつたはずだお前の知つてゐる織斑一夏は死んだと、俺は一人も仲間を作くるつもりはない」

「なら、私はお前を見捨てない！お前を一人にするものか…」

「…………正氣か俺はいずれ世界中を敵にまわす事もする人間だぞ」

一夏は冷静に答えるが篝は一夏を抱き締めた。

「一夏、私はお前の味方だ、例え世界中がお前を認めずにおいても私はお前の味方だ」

「…………後悔しないのか」

篝は「しない」と言い、一夏と篝はこの夜ずっと互いの体を抱き締めた状態で朝を迎えた。

一 夏の過去（後書き）

筆とのフラグたつたかな、とりあえず一夏の過去は話が進むに連れて細かく書いていくつもりです。

準備（前書き）

話が急に進ませて申し訳ないです。

この小説は原作とちょっとずれて、すすませますので理解してください。

「…………。」

「…………。」

入学式翌日の朝8時で一年生寮の学食で朝食を取る一夏と第、二人の朝食は和食であった二人は言葉を語らず静かに朝食を食べていた。

この学食に一人しかいない男性である一夏は注目の的であった、それは仕方ないIIS学園は女子高校と同じなのだから、そこに男が一人いれば嫌でも目立つ、そして今、現在3つのグループが出来ていた。

一つは昨日の一夏の『遊び』発言に怒りを覚えて敵意を表している者達である、今も一夏を見て敵意を表している。

二つ目は特に気にせず一夏の話題で盛り上がっている女子グループ達このグループが一番多い人間、人を憎み続ける事は疲れるものだからだ。

そして三つ目はどうやって一夏に近づこうか考えている女子グループ達だ、しかしらは少數である一夏の『遊び』発言が元で近づこうと

する人間はかなり減つたが、この学園に一人しかいない男子に声をかけたいと思つてゐるのだろう。

第は昨日の夜の出来事を考えていた。

篇は昨日の一夏を抱いた時の感触を思い

(一 夏の胸板……厚かつたな／＼／いや何を考えている私は！／＼

六年前より更にカツ「よくなつた幼なじみを思い、何より昨日の出来事が忘れられないのか急に表情を赤くしてしまつた筈であつた。

「…………どうした筈、顔が赤いぞ？」

「い、いや何でもないぞ一夏ー（誰のせいだと思つてゐる馬鹿者！）

筈の表情が気になり尋ねた一夏だが筈は慌てて否定した一夏は筈が

表情を赤くしている理由はわからなかつた。

(カツ「よくなつたが鈍感な所は相変わらずだな)

篠は今のやり取りをしてカツ「よくなつた幼なじみ見てそう思つてしまつた。

「お、織斑くん、隣いいかなつ？」

朝食のトレイを持った三人組であつた女子が三名ほど一夏と篠のところにきた篠は少しムスッとしていた。

「……別に構わない」

一夏が表情を変えずそう言つと一人はホツとしていて一人はガツツポーズしていた、食堂がザワザワと騒がしくなつた。

「何よ！あんな男に話しかけて恥と思わないの」

「先越された！」

「織斑くんはムツツリキャララビ……」

一夏に敵対心を向けるものの発言がどび、一夏と話しかけようと考
えていたが先を越された事に嘆く女子、そして何やらメモを取つて
いる人もいた。

「うわ、織斑くんって朝すつご飯食べるんだー」

「お、男の子だねつ」

ちなみに一夏は静かに食べていたがすでにご飯を五杯もおかわりし
ている、トレイの隣にお椀が4つも乗っている

「…………俺は元々AT乗りだからな、これくらい食わなきゃ体がも
たない」

実際に一夏の言つたとおりAT乗りは激しく体が揺れ初心者が初め
てATに乗つた時は機体の揺れに体が追い付かず吐くものがあとを
たたない、それ以前に体力を激しく消耗するため食事はAT乗りと
つては大事なものだ。

「…………それで体がもつのか?」

一夏は女子三人組のトレイの食器を見て呟く……彼女達はパン一枚におかずも少なめであった。

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平氣かなつ？」

「お菓子よく食べるしー」

一夏はこの三人組を見て呆れていた。

「…………一夏、そろそろいくぞ」

「まて、俺もあと少しで食い終わる」

篝はトレイを片付け一夏も一口くらいの量の白米を口に入れてトレイを厨房の所に持つて行く、一夏が席に立つと女子三人組の「ああ」とした声が聞こえるが一夏は無視した。

それから教室でいつもどつり授業が始まり一夏は真面目に授業を聞いていた。

相変わらずといふが当然のよう^{ヒトコト}にEIS専門の授業ばかりだ……一夏は先生が言った言葉をノートで^記しEISの知識を頭に叩き込む。

それから授業が終わりのチャイムがなる、一夏はいつもどつり授業でやつた所の復習を始めていた他の生徒の殆どが休み時間は休憩しているが一夏は相変わらず復習をしていた。

そして次の授業が始まり一夏は次の授業で使う物を用意していた。

「ところで織斑、お前のEISだが準備まで時間がかかる」

授業が始まる前に千冬に告げられる一夏。

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそつだ」

専用機と聞いてクラスメートがザワザワと騒ぎ出す。

無理もない代表候補生でもない一夏がいきなり専用機が渡されることが普通はないからだ。

「せ、専用機！？ 一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出てるつて」と……

「ああ～。いいな……。私も早く専用機欲しいなあ」

やはり専用機が『えられる事にクラスの大半が一夏に羨ましい感情を抱いていた。

「安心しましたわ。訓練機で対戦してはフュアではありますもののね」

相変わらず一夏を見下した態度で喋るセシリアに筹はセシリアを睨み付けていたが一夏は筹と田を合わせ気にするなど手を振った。

それから全ての授業が終わり、一夏は直ぐに教室を出ようとしたら時に……。

「一夏……対抗戦に向けてこのあと一緒に訓練しないか

「訓練か……別に構わないがEISは上級生が優先だ俺達が使えるとは思えないが」

「ならば……久しぶりに剣道をしないか一夏」

「……剣道か」

一夏は昔を思い出していた、小学生の低学年の時から剣道を始め互いに力を高めあつたあの時を……と一夏は小学生の時の思い出を少し思い出していた。

そして剣道場に入ると練習の準備に入っている女子部員がいた一夏が入ると部員は静まる、一夏の事をいろいろと噂をしていた。

「あれが織斑くん……。」

「尊じいやHISSTOの戦いを『遊び』って言つたらじこわよ

ひそひそと噂を話が聞こえる一夏だがいつもどつつ一夏は無視した。

「それと一夏、剣道は当然のように続けているな

「いや、剣道は確かに中学まで続けたが軍に入つてから一年はやつてないな」

一夏の言葉に篝は「そうか」と残念そうにしていたが一夏は……。

「確かに剣道は一年はしてない、だが『剣術』は軍で鍛えこまれた問題ない」

剣道と剣術……」の言葉の意味を籌は理解しているのかは一夏は知らないが一人は防具をつけ礼をして互いに構える。

一夏は竹刀を上段に構えるが、その上段構えが変わっていた。

「一夏、それは？」

「筹……」一つ言つておぐが俺がやるのは剣道じやない剣術だ」

一夏の上段構えは、あの一刀必殺の剣術、薩摩示現流の上段構えである。

その独特的の構え、そして一夏の雰囲気に筹は……。

(一夏……なんて威圧感だ!!)

一夏の雰囲気に丘惑つ筹である……そして一夏踏み込み……。

「ひえええい……。」

「……？」

一夏の雄叫びに篝は驚き…………一夏は掛け声と合わせ竹刀を降る。

篝は面の部分の攻撃とわかり防ごうとするが認識が甘かった薩摩示現流は一刀必殺…………一夏の斬撃は凄まじく篝の竹刀」と両断した。

(何だと……)

竹刀が両断して面の所にあたる寸前に一夏は止めた、そして一夏は
……。

「…………。まだやるか

「いや、私の負けだ」

篝は自分の負けを認めた、周りのギャラリーは何が起きたか理解が出来ていなかつた、そして一人は防具を脱ぎ、互いに顔を合わせる。

「まさか竹刀」と両断するとは思いもしなかつたぞ、一夏

「レッドショルダーにいた時、訓練で一撃で相手を仕留める訓練が大半だった、剣術もまた一撃で仕留める訓練をしていたからな」

「そりゃ、だが一夏、次は私が勝つそれまでまつていり」

篠は一夏にそう告げた、篠は訓練の事など忘れている次は一夏に勝つとそれしか頭に入つてなかつた。

それから何回か竹刀を交え夕食の時間になると汗を拭き制服を着て剣道場を二人は後にした……。

「すまないが篠、先に戻つてくれないか

「どうした一夏?」

「少し用事があるすまない」

一夏はそつ篠に告げて篠と別れた。

一夏は携帯を出してある人物に電話した。

「そりゃ俺だ一夏だ頼みたい事がある」

一夏はひそひそと携帯で話した……そして一夏は。

「…………そりゃ次のお試合までに持つてくれ一応、保険のためだ」

一夏は電話でそりゃって携帯の電源をきり一夏はその場を後にして一年生の寮に戻った。

AT
vs
IIS (前書き)

戦闘シーンを書くのは難しいです、誰かアドバイスをください！！

セシリ亞との対決当日、一夏は第二アリーナ・Aピットにいた彼は腕を組んで静かに黙っていた。

「…………遅いな」

彼は待っていた自分の専用機たるI Sがこない事に彼は表情には出さないが内心イライラしていた。

「お、織斑くん織斑くん織斑くん！」

山田先生が慌てた様子で一夏の所に駆け足でやつてきた。

「どうしました？」

「織斑くんの専用機がトラブルにあり使用不能になってしまいまして！」

「な、ならば一夏は出れないですかーー！」

この事態に先に反応したのが一夏ではなく篠であった。篠は山田先生に詰めより山田先生はアワアワとして落ち着きがなかつた。

「少しば落ち着け」

一夏の慌てぶりを止めるように一夏は冷静に止めた。

「何を言つてゐる一夏ー。EVAがなくてはー試合に出れんのだぞー。」

「いや、その心配は入らないぜお嬢さん」

篠が一夏にそう言つていつた時に後ろから中年男性の声が聞こえた、一夏はそれに反応して中年男性に近づく。

「とつとつあん、来ててくれたか」

「よお、一夏ーお前さんが俺に頼みじとは珍しいと思つたがじつは「い」とか

がはははーと笑い一夏の背中を叩く、その光景に篠は尋ねた。

「一夏、その男は何者だ?」

「ああ、俺が所属していた基地の整備兵だ、ちょっと前に頼み」とをしてな」

「おつとーせうだった一夏、少しまつてな」

ひとつあんは走り、一大の小型トラックをアリーナピットにつけてトラックの荷台に乗せている物を見せた。それに篝は呑く。

「A.Tだと」

トラックにつまっていたのはA.T、スコーピードックであった。

「すまなことつあん」

「大変だつたんだぜ一夏、ゴイツをE.I学園に持つてくるのは骨がおれたぜ」

一夏は中年男性にお礼を言つて、中年男性はがははと笑つていた。

「まさか一夏、ATで戦つつもりか」

「…………ああ、もともと非常時の時に用意して貯つたものだが、ISが使えないならコイツを使ひ」

「なにを「バカな事をするな!」千冬さん」

篠が言いかけようとした時に、千冬が叫ぶ、そして千冬が一夏に近づき……。

「一夏、貴様も軍人の端くれなら、わかるはずだATがISに「勝てる確率が高いのは分かつていてる」「一夏…………」

一夏は冷静に千冬に言いATのパイロットスーツを着て最後はヘルメットを被り、スコープドックの頭部から入り最後はヘルメットに付いているゴーグルを目線の所に下げてスコープドックを起動させた。するとスコープドックが起動するとエンジン音がアリーナピットに響く。

「しつかりやりな一夏」

『ああ、ありがとうとつあん』

一夏はアリーナピットから出ようとした時に一夏は幕に田が会つ幕は……。

「一夏、勝つてこい」

『ああ』

彼はそれだけつげで、ローラーダッシュでアリーナピットの外に出た。

スコープドックは外に出て、ジャンプしてそして着地しグライデイングホールの音があたりに響いた。

突然、ATがアリーナに現れアリーナの席にいる生徒はザワザワとしていた、そして同じくすでにアリーナの会場にいたセシリ亞も何故、ATがここにと疑問に思っていた。

『待たせたな』

一夏が無線でセシリ亞に言ひ。

「な、アナタ！バカにしてますの！ATでわたしのブルー・ディアーズの相手をするつもりですの！？」

『そのつもりだ』

セシリ亞は一夏にたいして怒る、会場の生徒もATに乗っているのが一夏だとは思わず驚いていた。

『専用機はございましたの！？』

『悪いな、トラブルがありTJは使用不可になつた代理としてコイツでた』

「なら、アナタに最後のチャンスをあげますわ、このままでは勝負になりませんわ、謝るならアナタを許してやりますわ」

『それはチャンスとは言わん』

一夏は当然のように言い、そしてスコープドックに装備してあるヘヴィマシンガンでセシリ亞のブルー・ディアーズに標準を合わせて語る

『いい加減に勝負を始めたいんだが、それともA.T.に負けるのが怖いのか?』

セシリ亞の中で何かがキレた、そしてセシリ亞は怒鳴る。

「もう許しませんわ!!! IRSが使えないから少しば同情した、わたくしがバカでしたわ!!! アナタには一度と立ち上がり敗北をプレゼントしてあげますわ!!!」

激情とともにセシリ亞はブルー・ディアーズの六七口径特殊レーザーライフルスター・ライトmk3がスコープドックを捕らえ、スター・ライトmk3のレーザーの閃光がスコープドックに襲いかかるが一夏は冷静に処理してターンして回避してヘヴィマシンガンでセシリ亞を狙いうちセシリ亞に命中させた。

『こんな安い挑発に乗るとはな』

一夏は平然と述べた。

「まぐれ当たりでいい気にならないことですわ!』

今度はレーザー攻撃ではなく、ビット攻撃であつた……ビット一機が左右、スコープドックに狙いを定める、一夏はローラーダッシュ

を途中停止して、後ろに下がり回避した。

『Iの武器の特性は理解した、この武器はお前の命令で動く、このビットを使っている間はお前はビットの制御に集中して他の攻撃は出来ないだろ?』

「なー?」

『その証拠に何故、ビットとレーザーと一緒に使わない』

セシリ亞はまさか一度の攻撃で自分の武器の特性を見抜かれた事に驚いたが、直ぐにいつもの口調で一夏に……。

「だったら何ですの?いくらブルー・ディアーズの特性を見抜かれたとしてもわたくしの敗北はありませんわー!」

レーザーと同時にミサイルの雨が空中から降り注ぎ、一夏のスコープドックに襲いかかるが一夏は巧みにスコープドックを操縦して回避する。

回避、直後に空中にいるブルー・ディアーズをヘヴィマシンガンで狙いうちブルー・ディアーズに命中させる、会場は驚いていた、まさかATTでIISと互角に渡り合えると、モニターで見ている山田と千

冬も生徒と同じように驚いていた。

「まさか織斑くん、ATでここまで互角に渡り合えるなんて思いもしませんでした」

「確かに驚くべき操縦技術だ、ここまでやるとは流石に思にもしかつた……しかし」

千冬は呟く。

「織斑の操縦技術には驚くべき所はある、だが織斑の乗っているATは一撃でも食らえば戦闘不能になる、それにセシリ亞は先ほどまで油断していたここからは本気になるはずだ」

千冬の言つとつATはもともと量産を目的とされてる兵器でありエラと違いATは使い捨ての兵器だ、それにATは従来の兵器と比べると装甲が貧弱なのだ。

(大丈夫だ一夏は絶対に勝つ)

篝はこれまで一夏が訓練している風景を見ていた、そんな真面目に取り組む一夏に、あんな見下すことしかしない女に負けるものかと思っていた。

そして会場では、相変わらずセシリアは一夏に攻撃が当たらず焦つていた、攻撃は回避されば回避された瞬間に攻撃される、その繰り返しセシリアは……。

（なんで当たりませんのー何故！？）

セシリアは今まで習い覚えたパターンで攻撃するが全て一夏に読まれてるようになんなく回避されている。

そしてビット六機全てを一夏に向けて全て一夏の前方後方……逃げ道を全て囲むように展開した。

（少し油断しましたが、これで勝てますわ！）

セシリアは勝利を確信したが、その考えは浅はかであつたスコープドックは突然ローリングを始めた、ローリングをしてヘヴィマシンガンの弾丸がビットに命中して爆発する、また一機と次々と撃破されていく、このローリングして射撃する戦法はATが周りの敵に囲まれた時にフルオート射撃で敵を一層する時によく使われる戦法である…………しかし一夏がやつた戦法はローリングしてセミオートで

狙い打つた事だ、普通ならローリングしたら周りが見えないものだが一夏はそんな普通なら見えないのにセミオートでビットを一発一発と狙い打つたのだ。

「…………そんな」

セシリ亞はこの出来事に畠然としていた、しかしその一瞬が彼女は背中をがら空きにしてしまった。

一夏はセシリ亞の背中に標準を合わせ、ブルー・ディアーズの翼部分を狙い打つた、セシリ亞が射撃音が聞こえたころは遅く、ブルー・ディアーズに命中したセシリ亞はバランスを崩して地面に落ちてしまつた。

『…………終りだ』

その言葉を聞いたのがセシリ亞の最後でブルー・ディアーズはスコープドックのヘヴィマシンガンの銃弾の雨とともに貰い、シールドエネルギーが0になるとセシリ亞は氣を失い、アリーナからブザーが響いた。

『試合終了。勝者 織斑一夏』

一夏の勝利が決定した、しかしこの出来事は周りを驚かせたATでISに勝つなど誰も想像していなかつたからだ、この出来事は試合終了後に生徒達の噂される事は言うまでもなかつた。

— 夏の覚悟とセシリ亞の変わづけ (謄書モ)

あまつタイトルの意味がない氣もあるけど……。セシリ亞がキャラ崩壊です、こんなのはセシリ亞じゃなこと言ひ方はコターンです! ! ! 。

一夏の覚悟とセシリ亞の変わりばえ

あの対決に勝利した一夏だが、クラス対抗戦の代表を辞退した本人の理由は……。

「興味がない」

その一言だけであった、一夏はそれだけの理由でクラス代表を辞退したのだ、一夏はそれだけ言い残しアリーナピットを後にした。

「一夏、何故辞退したのだ？」

筈が一夏に尋ねた……一夏は……。

「言つたはずだ俺は興味がない」

「だが、それだけが理由ではないだろ」

筈が真剣な表情で一夏に問い合わせる、一夏は冷静な口調で……。

「あのセシリ亞と戦つてわかつたが、ここ的学生はエサをファッショント何かと勘違いしてる連中が多い、俺はそんな奴らと戦う事に

興味がないそれだけだ

一夏は、別にEISを玩具と認識してゐる訳ではない一夏の中でもEISは強力な兵器としての認識はある、しかし現在のEISの戦いは兵器としてではなくもっぱら競技と認定されている、一夏はそれを理由にEIS同士の戦いは『遊び』と言つたのだ。

それから一夏と篠は自分の部屋に戻つた一夏は部屋で相変わらず教室でやつたように今日、やつていた授業の復習をやつっていた、篠は一夏の勉強姿勢に感心していた。

(うむ……一夏の真面目な所は感心だな、昔はあんなに勉強が嫌いだつたくせにな)

篠は小学生の頃の一夏を思い出して、一夏は勉強が嫌いであり自分から勉強するほうではなく、よく篠が一夏と無理矢理勉強に参加させた事もあったほどだ、だが今は自分から進んで勉強している、篠はそれに感心していた。

「ンン。

部屋からノックする音が聞こえ篠はそれに気づきドアに向かい声を

かける。

「誰だ？」

篝はそう言って声をかけたと同時に扉を開ける、そこにいたのは今田、一夏と対戦して一夏に敗北したセシリア・オルコットであった。

何故、セシリアがここにと篝は一瞬、疑問に思つたがすぐには……。

「貴様！ 一体なんのようだ……！」

「アナタに用はありませんわ、わたくしは一夏さんと用がありますの」

セシリアは篝の言葉を無視して一夏の所に詰め寄る。

「一夏さん、お話があつます！」

「…………なんのよひだ？」

セシリアは向やう怒りており、一夏は無表情で言葉を返す。

「何故、辞退しましたの！？」

セシリ亞は何故、一夏が辞退したのか、それを聞きにきたのだ。

「……興味がないからだ」

一夏はそれだけ答え、またノートに目線を戻す。

「そんなのが理由になりませんわ！！わたくしはアナタに負けました、だからわたくしがクラス代表になる理由はありませんわ！それをアナタはわたくしを侮辱するつもりですか！」

セシリ亞は自分を負かしたのに、それを勝手に辞退し、自分にクラス代表を渡した、それは彼女のプライドが許さなかつた。

「……。一つ、聞きたいお前はHSを何だと思つて居る

「え？」

一夏の問いにセシリ亞は先ほどまで怒っていたのに對して一夏の問
いに静まる。

「……俺もISが最強の兵器である事は認める、だがその最強の兵器を『えりあれお前は人の命を奪う覚悟はあるのか?』

一夏の言葉にセシリアは固まる。普通の人間がいつよりも一夏の言葉は重みがあるからだ。

「……。ISは兵器だ兵器を扱う以上、人の命を奪う場面はいくらでもある、お前にそれだけの覚悟はあるのか?」

覚悟…………その言葉はセシリアに深く響く。

「だがお前は、ISを兵器としてではなくファッショント認識している」

「そんなわけありませんわ!」

セシリアは一夏の言つた言葉を否定する。

「……だが実際どうだ、お前がとつた行動は人を見下し、他人の国を見下し、そして戦いのさいは戦いの本質を理解もしていない、何よりISを自分のドレスと勘違いしている」

その言葉に先週、起きたクラスの出来事をセシリアは振り返る、そこには「一夏は……」。

「そんな、兵器をファッショント勘違いしている連中と馴れ合ひの気はない」

それだけ一夏は言い、それ以上は語らなかつた。

（あまりにも…………覚悟の差が違いますわ）

セシリアは自分と一夏の覚悟の差に落ち込むが…………ある感情が生まれた。

（織斑一夏…………お兄様！）

一夏の器の大きさ何より覚悟にセシリアは、このような感情が芽生えてしまった。

「一夏さん、いえお兄様！」

お兄様との言葉に先ほどまで見守っていた筈は畠は畠然としており一夏

も疑問に思つてしまつた。

「貴方の事をお兄様と呼ばせてくださいー！」

「まで一夏はお前の兄ではないのだぞー！」

簞も突然のセシリアの代わりばえに慌てて止めにはいるがセシリアはお構いなしに……。

「……」まで、覚悟が出来て器が大きい殿方はわたくしの理想でしたので…だからお兄様ですわ！」

流石、先ほどと変わり尊敬の表情で一夏を見ているセシリアは、人を見下していたセシリアはもういなかつた。

「……。好きにしる」

「はい、お兄様！」

「い、一夏あああああーー！」

一夏はもつ好きにしると叫わんばかりに、許してセシリアはそれに喜んび簞は何やら納得がいかずに怒鳴りちらす。

これにより、セシリ亞も代表を辞退し自動的に一夏が代表となつた。

— 夏の覚悟とセシリアの変わっぽえ（後書き）

な、なんとセシリアが妹キャラになってしまった、この後の展開がどうなるか、次を楽しみにしてください。

一 夏の専用機（前書き）

一 夏のオリエINSが登場です、あまり細かな説明はないですがどうぞ。

一 夏の専用機

セシリ亞との対決から何日か過ぎ、今日はE.S学園も休日なため授業は休みだ。休日でも一夏は、やる事は変わらず朝早く起きて早朝のランニングをしていた。E.S学園のグラウンドは一周が五キロほど、あるためランニングのコースにするには丁度いいため一夏は毎日、朝練の時はここを利用している。

「…………よし、次は」

体が温まつたのか一夏は次は腕立てを始めた、その次は腹筋、スクワットを始める、軍人は基礎体力が大事だがそれ以上に一夏が所属するAT部隊は、じやじや馬であるATを扱うのだ、この様に毎日必ず体を作る鍛練は怠らない。

基礎訓練を続ける一夏がある立て札…………元より白いウサミミが地面に突き刺さってる事が気になっていた、しかもウサミミの立て札に……。

『いつくんー引っ張つて!』

と、書かれているのだから、しかし一夏は不自然だと思い、このウサミミを無視して鍛練を続けた。

それから三時間が経過して全ての早朝訓練は終了した、最初の鍛練時は日の出が出ていなかつたが、今はすっかり太陽が昇つていた。

その場を後にしようとした時に、一夏はまたウサミミに目線を移すと……。

『いい加減に引っ張つてくれないかな！眠いんですけど……』

何故かウサミミの立て札が変わつており、一夏はいつ変えたんだと疑問に思つてしまい、こんな所に立て札があつても邪魔なだけだと思い、一夏はウサミミを引っ張つこ抜いた。

引っ張つこ抜いたが何も起きなかつた、そう思つた矢先に上空から何やら降つてきて一夏の直前にある物体は着地した、その物体は巨大な二ンジンであつた。

「やあやあ、いつくんおひさだね！」

二ンジンから一人の女性が現れ、頭にウサミミを被り服装もどこかのファンタジーのキャラクターが着てそうな服装であつた。この人物は篠ノ之束、ISの産みの親であり全世界の政府機関の人間が全力で探している世界でもつとも有名な人物だ。

そんな一夏は、とりあえず無視して……その場を去るのとしたが……。

「あれあれ？ いつくんど！」に行こうとしているのかな？」

束は一夏の肩を掴んで阻止した、しかも笑顔なのだが何やら少し不機嫌なオーラが漂っていた。

「だいたい、いつくん！ あんな判りやすい所にあるのにどうして直ぐに引っこ抜いてくれないのかなー！ 束さんねむねむなんだよー！」

腰に腕を組みパンパンと怒る、仕草をする束に一夏は呆れていた。そもそも……。

「…………。何でアンタがここにいるの？」

「お、やつと聞いてくれた！ 実はこの天才束さんがいつくんにプレゼントを渡しにきました！」

えっへんーと胸をはり、また上空から物体が急降下して、地面に突き刺さり、コンテナからエサが出てきた。

「じゃじゃじゃんー」の天才束さんが作った、今、現在のI-Sもどちらも凌駕する第四世代型、その名も『赤肩』…

そのI-Sは一夏には馴染みがあるものであつたATのドック系の基本的なカラーリングの縁に、そして一夏には忘れられない過去である右肩が赤く塗られているのだ。

「どお、すういでしょ！」

未だに第三世代型が実験段階にあるなかで、束が当たり前の様に用意した第四世代型の『赤肩』……。

この機体の存在は他の科学者の努力を無駄にしていると思われるが、一夏は別の事を考えていた。時であつた……。

「束……。これはなんだ？」

突然、静かな声が後ろから聞こえ、一夏は後ろに振り向き束は何故か嬉しそうにしていた、その人物は篠ノ之束を唯一、叱り束の世界に入れる数少ない人物である、一夏の姉の織斑千冬であった。

「あーちーちやんーおひたーだからせばぐーぶへー。」

束が飛びかかわつとした瞬間に千冬のアイアンクローラーが束のこめかみに入る。

「ハルカニ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローラーだね」

そんなやり取りをして、一夏は呆れて……やはりその場を退場しようとしたが……。

「ダーツにこくつもりだ一夏？」

「ハリだよこくつもり、どこにこくのかな？」

二人に強制的に止められた一夏、どんなに冷静で強くなつても、この一人には勝てないかも知れないと一夏は思つてしまつた。

「それより束、前回、一夏の専用機を使用不能にしたのは貴様だな」

「さうすがー！ちーちゃん正解ですー！」

一夏「リと笑い親指を立てる束に千冬は厳しい表情になる。

「貴様のお陰で一夏はA-Tで戦つはめになつたぞ」

「でもでも、いつくんは勝つたからー問題ないよーそれ以上にあんな出来損ないの機体でいつくんが戦うのは束さんは許せないよー！」

笑顔で語る束、この束は天才であるが故にあまり他人と関わる事はない、それ以上に身内と自分の世界に入る事を許した人間にはほとんど甘く、自分の身内のためなら世界相手に戦う事も平然とやってしまう、それが天才篠ノ之束だ。

「……姉貴、あまり束さんを攻めるな俺はあるの出来事は気にしてない。」

一夏はとりあえず千冬と束の間を止める、それを束は喜び一夏に抱きつく。

「一夏から離れろ束」

「あれあれ、ちーちゃんひょつとして嫉妬？」

またもや、千冬は束にアイアンクローラー……そんなやり取りを繰り返し、それから……一夏と千冬、束はEIS学園のアリーナに来ていた。

「一夏、とりあえず試運転はしておけ」

束に送られたEIS『赤肩』を装着した一夏はある事を聞いた。

「……アリーナを貸し切りして大丈夫なのか姉貴？」

「安心しろ束が来た時点ではこのアリーナは私が封鎖した、だから遠慮なくやれ」

どうやら千冬は束が来た事を関知すると直ぐ様、アリーナを貸し切りしたらしい、もつともEIS学園に篠ノ之束がいると知られては学園全体がパニックになることは間違いないからだ。

そんな束はそんな事を気にせず鼻歌を歌っていた。

「ターゲットを出すぞ、目標は五つだ」

千冬がそつ言つと白い的が五つ出てきた。そして一夏は……。

「……田標を確認破壊する」

一夏は空高く上がり、そして『赤肩』に装備されているアサルトライフルで目標を標準を定めた……そしてトリガーを引くと赤い閃光がターゲットの一つに命中した……その威力は凄まじく地面に激突した時に出来たクレーターが凄いことになっていた。

一夏はこの威力に驚いていた。

「それ、破壊力と命中率を重視したビームライフルと卑さと連射を重視したビームマシンガンと二つのモードに切り替える事が出来るかね」

一夏はその説明を聞いた時に束は……。

「あ、それといつくんがATで好んで使っていた武器を強化したものが大半だからね『赤肩』の装備は」

それを聞いて一夏は『赤肩』の武装を展示した……そして選び『ビームソリッドショーター』を選び左腕にソリッドショーターに似

た兵器が展開され、一夏は狙い加速しながら狙い打つ、ソリッドシユーターと扱いは同じだが破壊力と命中精度は桁外れに違っていた。

「姉貴、次のターゲットを頼む」

『わかった』

ターゲットを展開され十のターゲットが展開された……。

次は……『ショルダーロケット弾ポット』名前が同じだが右肩に展開され、そして狙い打つ時に全弾すぐにロックオンされた、そして一夏は発射してロケット弾の雨が全てターゲットに命中した……一夏はあまりの高性能に驚いていた。機動力と武器のバリエーションの広さに……一夏は驚きが隠せなかつた。

「どう、いつくん感想は?」

「正直……高性能に驚いている、武器もこれまで使ったATの武装の威力と性能を遙かに凌駕している」

そもそもライフルの一撃の反動が少なく威力が凄いことに、ソリッド

ドシューターもロケット弾からビームに変わり命中率と破壊力が上がり、ショルダーロケット弾ポットもあれほど素早くマルチロックが出来るとは思つてもいなかつたからだ。

「ちちち、あれだけで驚いたやダメだよいつくん、『赤肩』にはね、雪片ボ型も装備されてるんだよ」

一夏はそれを聞いて驚いたかつて、自分の姉が現役の時に使つていた武器であるからだ。

「とりあえず、試運転は終わったな、貴様の『赤肩』は私が学園に報告する」

『赤肩』の試運転が終わると一夏は、ある事を考へていた……。

(レッドショルダーの苦しみなど、誰にもわかるばずもない、そう誰にも)

一夏にとってレッドショルダーの過去は自分の甘さが招いた過去、一夏に取つては忘れられたくても忘れない過去だ。一夏は『赤肩』の赤は自分の戒めだなと思つた。

そんな事を考えていた時に何故か束は居なくなっていた。それを千冬と一緒に夏は、またかと呟き一人はアリーナを後にした。

中国の代表候補生（前書き）

原作を大切にするかたはこんなのは鈴じゃないと思われます
これは、はじめから言つていますが気に入らないのであればシターノしてください。

セシリアとの対決から何日かたち専用機を束から貰つた一夏……
IS学園にある変化があつたそれは学園に三つのグループが出来始めたのだ一つは最強の看板を掲げているISをATで撃破してIS絶対主義とも言える、女子グループこのグループは完全に一夏に敵対心を出しており何かと一夏に遭遇すれば敵意を表しているグループであった。

二つは特に気にせず一夏に普通に接するグループ達、立場的に中間にいるグループである、このグループが一番多い人間誰しも気軽にしたいものだからだ、今も一夏と会えれば普通に話している。

そしてこれは少数であつたが第にとつては頭が痛い存在であつたそれは……。

「あ、あの……織斑君……。」

胸に手を当てて表情は赤く染まつておりドキドキとしている心臓を宥めよとしているが一夏に近づくつれてその高鳴りは収まらない。

「あ、あのね……ATで戦ったとき……凄かつたよ、こ、これからも頑張ってね！――／＼／＼」

緊張しそぎてテンパリ少女は一夏から走り去った。

その光景に篠は不機嫌であった。

「モテモテだな一夏」

「…………あれは違うだろ」

篠はやはり…………」の六年間でカツコよくなつたが相変わらずの恋愛ごとに鈍感な一夏に喜んでいいのか、悲しんでいいのか篠はわからなかつた。

そうこれが篠にとって厄介な存在、一夏に本氣で恋をしてしまったグループである、このグループも最初のグループのように一夏に敵対心を剥き出しにしていたグループだった、一夏の『遊び』発言に怒っていたが…………。

一夏は無愛想で冷静に思えて大胆な発言に加えてATでISに勝つなど規格外な現象を彼女達に見せた、最初に一夏が言った言葉、「IS同士の戦いは所詮遊び」この発言は世界中のIS操縦者に喧嘩を売った言葉であるからだ、一夏は自分の首を自分で絞めているのに関わらず冷静にしている、それが開き直りなのかまたは考えなし

のバカなのかといろいろと意見は出るだろうが…………しかし……冷静で強くそして大胆な発言に加えて、一夏の独特的オーラに加え今の世の中の男には絶滅してもおかしくない驚異的な雄度に彼女達は惚れてしまつた。

今まで彼女達が見たことがないタイプの男に本氣で惚れているのだ、今も一夏を廊下から熱い視線で隠れて見ている女子もいるからだ。

（ふふふ、だが私は一夏との関係が長い。）

一夏が騒がれる事はなくなつた、しかし本氣で恋をしている乙女達という強者がいるにしても筈は自分が幼いころから過ごしていた経験と同じ部屋に済んでいる強みがあるため強敵がいるなかでも余裕があつた。

「お兄様、頑張つてくださいね」

勉強している一夏に、ニコニコと笑顔で迎える一人の少女……セシリア・オルコット、一夏を兄と慕う彼女も他の女子とは違う形だが一夏の魅力に取り込まれた少女の一人であつた。

（一夏お兄様は、わたくしの理想の殿方そのものですわ、ですから

クラス対抗戦には勝つて貰いませんと

恋愛とは別の感情が彼女の心を取り込んでいた……。

一夏を兄と慕うセシリアに筈は少し複雑な感情であった、セシリアが一夏に対しする感情は恋愛ではないが、しかし彼女は一夏を独り占めするように毎回必ず、授業と睡眠以外は一夏の側を離れようとしている筈としては一夏と一人きりになる時間が授業を終えた時、部屋にいるくらいしか一人きりになれない、しかしセシリアの行為は一人の異性としてではなく親愛に近い感情であるためか筈も複雑な心境であった。

「それよりお兄様、転校生の噂聞きました、何でも中国の代表候補生らしいですが……」

「いや……俺も噂をくらこだ

「中国の代表候補生が来ようと、今のところ専用機がありますのわ四組か一組のお兄様とわたくし達ご兄妹だけですわ、中国の代表候補生が来ようとお兄様の敵ではありませんわ」

本当の兄妹ではないがと普通はツッコミが入るだろうが、一夏を兄と慕う行為は今に始まった事ではなく一夏も最初のうちだけと思っていたがセシリヤが一夏を兄と慕う気持ちは本気らしく一夏は仕方

なくもうあまり突っ込まない事にしたのだ。

しかし……」Jのセシリアの妹発言に千冬が厳しい表情になりセシリアが怯えた事を付け加えよう。

「 その情報、古いよ」

教室の入口から、声が聞こえた女性にして小柄な部類に入る少女であるが、スレンダーな体系にツインテール、その少女は筹とセシリアとは別の美人の部類に入る少女であった。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。 そう簡単に優勝できないから」

「…………。」

ビシッと人差し指を前に差し出して宣戦布告をする少女を一夏は静かに見ていた、そこに少女は一夏に視線が会つと……。

「一兄！久しぶりね中国の代表候補、凰鈴音、参上よー！」

一夏と面識がある少女なのか一夏に親しげに話す、しかしそれが面

白くないのかセシリ亞が鈴に……。

「ちょっとまちなさい！なんですのアナタお兄様にむかって馴れ馴れしいですわ！」

セシリ亞が鈴に絡む一夏を兄と慕うセシリ亞に取つて兄と呼ぶ鈴はセシリ亞取つては面白くないのだ。

「誰アンタ？私は久しづりにあつた一兄に話しかけてるんだけど邪魔よ、それにアンタお兄様つて……。」

「一夏お兄様はわたくしのお兄様ですものお兄様と言つのは当然ですわ！」

セシリ亞の発言に鈴は睨むセシリ亞も負けじと鈴を睨み一人の視線がバチバチと響く、この状況に篠はと言つと……。

「一夏……止めてくれないか？」

「…………知らん」

篠は、兄バカ一人の争いに一夏に止めさせようとするが争いの発端

である一夏本人は何故こうなったかわからずについた。

しかし、このカオス空間に救世主が現れた……。

バシン！バシン！

二人が睨み合つてゐる中に出席簿が一人の頭に的確にヒットさせた、二人はあまりの痛さに頭を抱えた。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ、それとオルコット席に座れ」

出席簿で一人の頭にヒットさせたのは千冬であった二人は千冬と視線が会うと……

「お、お姉様……。」

「ち、千冬姉……。」

ドスードス！

千冬の出席簿がまたもや一人の頭に的確にヒットさせたしかも先ほどと比べると何やら鈍い音が聞こえた。

「織斑先生と呼べ、貴様達に姉と呼ばれる筋合いはない、いい加減に戻れ、席に座れ」

「す、すみません……。」

一人はやられた頭を手に当てながら鈴はドアからどきセシリ亞は自分の席に戻る。

「またあとで来るかね！逃げないでよーー兄ーー」

最後に一夏に通告する鈴。

「さつさと戻れ」

「は、はいっー。」

鈴は千冬に注意されて自分のクラスである一組へ戻った。

これから授業が再開だなと思われたが……。

「……。一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだつたな

「お、お兄様！？あの子とはどういづ関係で　」

一人は鈴との関係が気になるのか一夏に詰め寄るが、それを千冬が見逃さず……。

バシン！バシン！

一人に出席簿の攻撃が入った的確に頭にヒットしたのは言つまでもなかつた。

「席に着け、馬鹿ども」

いつして、今田もエリの授業が始まる。

衝突する兄バ力

午前の授業が終り、一夏は食堂に来ているが、簞にセシリ亞といつもと変わらないメンツに一人、新しいメンバーが加わっていた、それは……。

「一兄！ニユースでISを使えるって知った時はビックリしたわよ！しかも軍隊に入つてたんだ！」

「…………まあISは成り行きだ、それよりおばさんは元気か?」

二人はテーブルにつき話をしている鈴は笑顔で嬉しそうに一夏と話
し一夏はいつもの口調と表情で言葉を返す。

「汗（夏）」

一夏と親しそうに話す鈴にセシリ亞から黒いオーラが体からあふれでて隣の席に座っている筧は冷汗をかいて一夏に助けを求めていた。

（お兄様は私の物お兄様は私の物……フ、フフフフフフフフ（笑）
。）

一夏を兄と慕うセシリアは鈴を凄まじいオーラと視線で睨むが気づいているか、気づいてないのかは知らないが鈴は気にせず一夏と話していた。

「こじで何故、篠はあまり鈴に絡まないのか理由は鈴はセシリアと同じ一夏を兄と慕っているからだ、篠は別に恋愛感情でなければあまり絡まないが、しかし……一夏と親しそうに話している鈴にやはり篠も複雑な感情ではあった。

（ま、まあコイツは一夏を兄と慕っている様子だ、ならば問題はないが……）

一夏と何のためらいもなく親しそうに話す鈴に篠は羨ましいという見ていた。

「一夏、ちゃんとどうしてこの関係が説明してほしいのだが」

「お兄様! いつたい誰ですの、この方は! ?」

篝は一応、鈴はどのような関係なのか気になっておりセシリ亞にかんしては自分が兄と慕う一夏が別の女性に兄と呼ばれているのが気になり聞いていた。

二人以外にも一夏に恋する乙女が興味があり頷く。

「一兄は私の兄さんよ、それだけよ」

フフンと笑顔で答える鈴。

「…………まあ、そう言つ事だ」

鈴の言葉にそう伝える一夏に篝と一夏に恋する乙女はホッと一息つく、じゅりやー一夏に恋愛感情があるわけではないようだが……しかし約一名納得がいかない女性がいた。

「な、納得がいきませんわ！いきなり現れた部外者が一夏お兄様をお兄様と呼ぶ事は許しませんわ！！」

「は？部外者はアンタでしょ、だいたい私は一兄とは小5から付き

合になのよ、それを勝手に一兄の事をお兄様つて笑つひやうわね

幼い頃から兄と慕つてこると告げやうに挑発をする鈴の言葉にセシリアはワナワナと体を震わせる。

「だいたい、アンタ誰なの？」

「なつ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリ亞・オルコットでしてよ！？まさか『存じないの？』

「うふ。あたし他の国とか興味ないし」

この言葉が楔となりセシリ亞はさらに表情を赤くして鈴を睨みつける、そして……。

「決闘ですか……！」

セシリ亞の言葉に一夏はトジヤブを感じたのは氣のせいではなかつた。

セシリ亞の決闘宣言に鈴は……。

「うふ、良じよあたし負けるつもりないもん

「良い度胸してますわね、次のクラス対抗戦で勝負ですわー。」

セシリ亞がそう宣言した時に一夏が……。

「……話の腰を折るよつて悪いがクラス代表は俺だからな」

「「あー。」」

一夏の言葉にセシリ亞は思い出し筹も一夏が勝利しクラス代表になつていた事を思い出した。

「じゃあ無理じゃない」

鈴も呆れた口調で返す、そこで鈴は一夏に……。

「ねえ一兄、クラス代表なんだよね、だつたらわたしがIISの操縦みてあげてもいいよ！」

「そうか……なら頼「お兄様！」なんだ？」

一夏が言おうとした瞬間にセシリ亞が話に割り込む。

「敵の施しを受けてはいけませんわ！！」

「あたしは一兄に言つてんのよ関係がない他人は引つ込んでよ」

「アナタは一組の人間でしょ！でしたらアナタが他人ですわ！」

「わたし一兄の妹だから関係あるわよ」

「わたくしも妹ですわ！」

「一兄の妹はわたくしよ」

「わたくしですわ！」

二人の兄バカにセシリ亞と鈴の言い合いが続いて筈はため息を吐き争いの発端である一夏は呆れていた。

「俺は……何かしたか」

「私が知るか」

一夏は簫に訪ねるが簫はそう返す。

「いりなつたら決闘ですわ！」

「だからアンタバカ？さつき一兄が言ったとうり一兄がクラス代表なんだから無理に決まってるじゃない」

鈴のもつともな意見である、セシリアは一夏に負けてクラス代表の座から外れたのだから。

しかしセシリアは……。

「お願いします！お兄様！わたくしにクラス代表の座を譲ってください！」

セシリアは真剣な表情で一夏に頼み込む……まあ一夏も別にクラス

対抗に興味がないので譲らない理由はないの…………。

「…………別に構わん」

「ありがとうございますお兄様!」

セシリ亞は笑顔で一夏の手を握る…………そしてセシリ亞は鈴のほうへ視線を合わせ……。

「聞きました決闘はこれで実行ですわ」

「うん、わかった」

「誰がお兄様の妹に相応しいか勝負ですわ!」

「まあ、わたしが一兄の妹に相応しいけど」

「あら空耳が聞こえましたわね」

「やう言えばわたしも」

「「ハフハフハフ」」

一人の間に異様な空間があり、それはとても禍々しいものであった。

それからの職員室では.....。

「織斑先生どひこまじょう（オロオロ）」

職員室で山田先生がオロオロとしている、それはこの書類である。

『一組、クラス代表セシリア・オルコット』

このよつに書かれているからだ。この事態に千冬も.....。

「つむ、確かに不味いな」

「織斑君が出場するつて政府の人は知っていますからね」

一夏のクラス対抗に参加する意味はあるクラス対抗は世界各国の政府機関の人間も見にくるのだ、しかも一夏は世界で初めて男性でI-Sを動かした人物だ、それだけに日本としての注目度も高いし日本政府としては一夏がクラス対抗に出場することは世界のアピールに繋がるので、一夏に出場はしてほしいのだ。

「それに世界各国から織斑の戦闘データを寄越せと来ているからな」

「本当にどうしましょ？」

「だが安心しろ手はある」

千冬は山田にある事を告げる。

「ヒギンソンマッチだ」

セシリア・ス鈴（前書き）

最新が遅れています。短い話ですがどうぞーー！。

セシリア vs 鈴

クラス対抗戦は始まり最初に一年生の部門が始まった、一夏が不参加となつて一夏に恋する女子達は残念がつていたが専用機があるセシリア、鈴は順調に勝ち上がつていた。専用機は四組の子も、持つていたが専用機が完成していないため不参加、つまり棄権したのである。

こうして専用機がある代表候補は一人しかもセシリアと鈴との一年生の技量の差は歴然であり訓練機で挑む一年生に対してセシリアと鈴は国が用意した専用機、技量も機体の性能も歴然として差があり代表候補にもなれていらない女子生徒が叶う筈もなくセシリアと鈴の決勝戦となつたのだ。

「フフフ、お兄様の妹はわたくしですわ」
「なに言つてんのよー兄の妹は私よ」

ついに始まる決勝戦、しかし彼女達に国の威信をかけた理由、自分の誇りでもなくただ一夏の妹の座をかけた戦いであった。

そして一人の戦いが始まった、先手を取つたのはセシリアで一夏の戦いで見せたBT兵器を一つ展開した、その一つは鈴の左右に展開

したが、鈴のI-Sの両肩から砲撃が放たれた、その攻撃にセシリアは啞然とした。

「な、何ですの…今の兵器は…？」

「なら特別に教えてあげるわ、私のI-S、シンロ、甲龍の武器の龍砲の攻撃には死角がないのよ！」

そう鈴の甲龍の武器、衝撃砲である龍砲は空間に圧力をかけて砲弾化して打ち出す、セシリアのブルー・ディアーズと同じ第三世代の兵器であるのだ、しかも鈴が話したとおり衝撃砲は死角がなくどの角度でも撃てるのだからセシリアからして見れば質が悪かった。

そう彼女の基本戦術はBT攻撃で相手の攻撃を止めてレーザー砲で相手に当てる事が基本戦術、しかし鈴の衝撃砲に砲身がなく見えないのが特徴である、先ほどの攻撃でセシリアは六基はあるBTを二つ無くしてしまった。

その二つの損失は重くセシリアに重くのし掛かっていた。

鈴は青竜刀と手に持ちセシリアに突撃する、セシリアは鈴を近づけさせないようにレーザー砲（スター・ライトmk3）を放つがしかし鈴は難なく回避、そして鈴は近づいて接近戦を仕掛けるがセシリアは、それに付き合わず、その場を離れるがセシリアに後ろから強い衝撃に襲われセシリアは地面に強く叩きつけられた。

「どお、今のはジャブよ！」

そお鈴の龍砲の砲撃であった、セシリ亞は自分のシールドエネルギーが大幅に減っていたのに驚いてた。ジャブなんて軽い物ではない今の攻撃でセシリ亞のシールドエネルギーの半分以上が削り取られたのだから。

(ぐ、厄介ですわ)

セシリ亞はそう呟く、セシリ亞の戦いは基本はヒット＆アウェイなのだ一撃一撃は対してダメージはあたえられないが確実にダメージを蓄積させ離脱する戦い、セシリ亞のブルー・ディアーズは鈴の甲龍のようなパワータイプではない。

そしてブルー・ディアーズは近接が不得手なのだブルー・ディアーズの装備は相手を近づけさせないのが前提で作られている甲龍に接近戦を許されたら九割以上の確率でセシリ亞は負けてしまう。

そして現在のセシリ亞は完全に不利であつたBT攻撃をしかけても自身はBT制御に集中している間は動けず、しかも鈴の衝撃砲、龍砲の攻撃は、どの角度でも撃てる砲弾であるしかも一撃一撃が非常に強い先も鈴がジャブと言つていた攻撃でブルー・ディアーズのシールドエネルギーが、かなり減っているのだBT兵器を使つている間に龍砲で攻撃される恐れがあり今はBTは使えなくなつた。

セシリアはこれで戦力の半分を失ったのだ。

セシリアの武装はレーザー砲のスター・ライト Mk3とミサイルの一つだけになってしまったセシリアの戦う戦術は決まった。

(BTが使えない以上、レーザーとミサイルを使い分けするしかありませんわ!)

そして戦いの火蓋は再び始まった。

セシリアはスター・ライト Mk3を放ち相手を近づけさせず動きながらの射撃に変更したのだ、鈴もそれを回避するが少しレーザー砲に当たりシールドエネルギーが減つていく。

「わたくしの武器は他にありますよ!」

「そんな攻撃、痛くも痒くもないわよ!」

セシリアは戦術を変えて鈴に攻撃は当てるようになつた、しかしセシリア本来の戦術ではなく代表候補に登りつめた鈴に通用するほど甘くない。

鈴の角度を関係なく撃てる龍砲に鈴の接近戦の戦いにセシリアは

押され始めたのだ。

「ああああああ……」

今、衝撃砲の攻撃でブルー・ディアーズのシールドエネルギーがゼロに近くなり鈴は止めを刺しに接近するがセシリ亞は……。

「かかりましたわね……！」

セシリ亞のミサイルが突然、鈴に襲いかかったのだ。

そしてミサイルは鈴に直撃したが……しかし……。

「今のは流石に驚いたわ、でもこれまでよ！」

鈴のシールドエネルギーも今のミサイルでかなり減ったが、しかしゼロにするまでに至らなかつたのだ、そして鈴は最後に青竜刀でセシリ亞に直撃させてセシリ亞のブルー・ディアーズのシールドエネルギーはゼロとなつた。

『勝者、凰 鈴音』

これで一年のクラス対抗戦は鈴の優勝で決まった。

『鳳、帰投してシールドエネルギーを回復させる次の試合がある』

千冬にやつされられて鈴は一体だれと試合をするんだろうと思つて、いた鈴はピットに戻り、ピットでアナウンスの声を聞いた時に耳を疑つた。

『それではHキビシヨンマッチを始めます!』

Hキビシヨン?……私は聞いてないわよと鈴は心の奥でそつ笑いた。

『本日のHキビシヨンマッチに参加する選手は先ほど一年生、クラス対抗戦で優勝しました鳳、鈴音、選手と男性初のIRS操縦者の織斑一夏、選手の試合になります!』

このアナウンスで会場の客席にいる女子達がざわめき始めた……そう一夏が参加することに特別席にいる政府関係者もよろしくかと心の奥でそつ笑いた。

「うして鈴は、またか一夏と戦うとは思つてもいず、ただアナウン

スを聞いてる事しか出来なかつた。

対決、セカンド幼馴染み

鈴とのエキビシヨンマッチの決定、エキビシヨンマッチの内容は一夏は千冬から聞いていた。

一年のクラス対抗で優勝したものと戦えと一夏は見世物になるエラの戦いに興味はないが、しかし機密だが日本政府から必ず出ないと命令されていた一夏は軍人、上の命令に逆らうほど、バカではない一夏は仕方なくエキビシヨンマッチに参加する事にした。

「いや、まさか一夏ちゃんといつして会えるとは思わなかつたじゃない！」

鈴とは別のピットで一夏の頭をわしゃわしゃと撫でる一人の青年、真がいた何故、軍人の真がココにいるのだと一夏は疑問に思つていた。

しかし、それだけじゃない……。

「ねえ一夏ーこれが一夏の専用機？」

何故か美沙までいるのだから、どうしてこの二人がココにいると疑問が尽きない一夏であった。

「……何故、お前達がココにいる?」

「ん、俺達が何故か知らねーが、おやつさんがココに呼ばれてな俺も同行しろって、それで着いて来たんだよ」

「え、真もー?アタシもだよーー」

二人にそう言われて一夏はおやつさんの事だから、また何かの情報を握りに来たんだのと思った。

普段は日本軍が誇る最高の整備兵だが裏の顔はあらゆる情報を握り世界の政、商、軍、のあらゆる関係者も頭が上がらない凄い人物なのだから、しかしその情報のパイプ元はドコなのかは不明であつた秘密の塊のレッドショルダー並みにあの人物も不明な点がいろいろ多いのだ。

「おい一夏、整備は終わつたぜ」

ピットから中年男性の声が聞こえる、おやつさんであつた本名は不明だが、その話は墓地のダブーとなつてるので誰も知らない。

「ありがとう、ひとつあん」

「良いいひじりよ」

豪快に笑い、裏の顔はあらゆる世界の関係者が頭が上がらない人物とは到底、思えないだろ？。

一夏はとつとつあんに礼を言い自分の専用機『赤肩』に背中を預け一夏は『赤肩』と一体化した。

『赤肩』と一体化した一夏はピチトから出てアリーナの試合会場に出た。

一夏の登場により観客は盛り上がり罵声に歓声の一いつが混ざった声が会場に降り注いだ、罵声はやはり一夏に敵対心がある女性で歓声は一夏の登場で喜ぶ女性であつた、そもそも一夏の周りに敵を作る振るまいが原因で一夏に敵対視する女子に本気で恋する女子の一いつに別れてしまったのだから。

そして試合会場の中心に位置を置くとそこに補給が終わり会場に先に入場した鈴がいた。

「一兄……。」

「…………。」

鈴は呟くが一夏は黙つて戦いの集中力を高めていた、一夏は既に戦闘モードに入っている。

『それでは試合開始!』

試合開始の合図がなると二人は一斉に自分の距離をとるため動き出した、鈴は近接戦が得意のため一夏に接近するが逆に一夏は鈴を近づけさせないようにヘヴィマシンガンのビームの雨を降らせて鈴を近づけさせない。

そして鈴も避けるが一夏の正確無比の射撃に次々と機体に着弾していく。

(ちょっとーー兄はHSの初心者でしょ何であんなに動き回って正確無比に撃てるのーー?)

鈴は疑問に思つても仕方ない、そもそも射撃は相手の武器の特性、弾道予測などいろいろと頭を使わなければならないが一夏は銃の扱いが初心者ではなく、ISの熟練者と同等、いやそれ以上の射撃を展開しているのだから。

「……行くぞ」

一夏は鈴に突撃してきた、更にヘヴィマシンガンだけでなく右肩に展開したショルダーロケット弾ポットと左腕に展開したビームソリッドシьюーターを展開し、『赤肩』はとてつもない加速をつけて最初にソリッドシьюーターで鈴の動きを止めて、そこにヘヴィマシンガンをフルオートにしてビームの雨が鈴に襲いかかり更に追撃にミサイルを一、二発を撃ち込む。

一夏のとてつもない一斉掃射に鈴の甲龍は地面に叩きつけられ直ぐに視線を戻すと一夏は鈴に接近してくる更に加速を付けて。。

「え、うそー！」

鈴も休むまもなく繰り返される一夏の猛攻に体勢を立て直し青竜刀を構えて接近戦を挑み、青竜刀を振るうが一夏は突撃しながら回避して勢いを付けて鈴にショルダータックルを仕掛けた。

鈴をショルダータックルで吹き飛ばしアリーナの奥にまで吹き飛ばし、一夏は更に追撃をかける為に鈴に攻撃を仕掛けるが鈴もやれるばかりではなかつた。

「嘗めないで一兄！」

そう忘れてはいけない鈴のIISの甲龍は龍砲と呼ばれる衝撃砲がある事に、死角が一切ない龍砲の砲撃の攻撃に一夏は回避するが弾道予測がつけにくく更なる追撃は出来なかつた。

(…………。試合で見て厄介と思ったが、予測出来ないわけではない)

一夏は鈴の龍砲をギリギリの所で回避し徐々に相手の弾道予測が可能になり攻撃を回避した、鈴の攻撃パターンもわかり始めたので一夏は止めを刺しに鈴に突撃する。

「まだよーーー！」

鈴は突撃してくる一夏に龍砲を放つが、しかし鈴の攻撃パターンを読みきつた一夏に通用する筈もなく鈴は一夏は今まで展開した武器をしまい、『雪片式型』を開けし鈴に近接戦闘を挑む。

鈴も一夏に会わせて青竜刀で雪片式型に対抗、激しい剣どうしの打ち合いとなつた。

「近接戦闘なら私のほうが上よ一兄」

「…………どうかな」

鈴の言う通り剣の打ち合いに一夏は徐々に押され始めたのが誰もが見てもわかるが、しかし一夏は至つて冷静であり鈴に青竜刀の攻撃を回避して一夏は鈴を蹴飛ばした。

「近接戦闘は何も剣だけじゃない」

一夏は確かに剣での近接戦闘は鈴に劣るしかし、それは剣だけであり一夏の言う通り近接戦闘は拳に蹴り投げ技など、いろいろある、まして戦場に身を置いた一夏なら型に捕らわれず臨機応変に動く事は造作もない。

鈴は確かに代表候補に登り詰めた実力者だ、IISの操縦力なら一夏より上であろう、しかし一夏は戦場に身を置いた実戦を潜り抜けた一夏が身につけたものは洞察力である。

相手がどのように動くか次はどのような戦法をとるなど一夏は戦場やレッドショルダーの実戦と変わらない訓練を生き延び一夏はあらゆる戦いをマスターしたのだ。

「コレで終りだ

一夏は雪片式型のパワーを最大に引き上げる。雪片式型には一夏には特別な意味もあった。

(雪片式型……これが第一回モンド・グロッソで優勝した姉貴の武器)

一夏はそれを思い最大加速で鈴に突撃する、そして鈴も負けじと一夏に接近するが一夏は、もう鈴の戦術を把握して青竜刀の攻撃を回避して一夏は雪片式型を鈴に胴に直撃させた。

直撃するとブザーがなり試合が終了した。

『試合終了。勝者 織斑一夏』

一夏の勝利宣言のアナウンスが響きHキビシヨンは一夏の勝利で幕を閉じた。

しかしエキビションが終るつかの間に……。

ズドオオオオンッ！！。

「！？」

事件は起きたアリーナにいる観客達も一体なにが起こったのか理解が出来なく周りはパニックになっていたが一夏はアリーナ中央に突然ある物体がアリーナのシールドを破り落ちてきたのだ。

その物体は煙で確認は出来ないが一夏の『赤肩』に警告が現れた。

所属不明のIISと断定。ロックされています。

ロックオンの警告が一夏の『赤肩』に出てているのだ。そして煙がありようやく確認が出ると、閃光が一夏を襲つた。

「…………ゲーム兵器か」

一夏は静かに呟く、そしてようやく不明IISの正体を見る事が出来た、しかしそのIISは不思議な形をしていて……それは。

全身装甲のI-Sだからだ。

吸血鬼の戦い（前書き）

久しぶりすぎて・・・読者に不愉快な気分にさせるかもしれません、それでも良いかたは読んでください。

吸血鬼の戦い

突然あらわれた全身装甲のISに会場にいる観客は、唖然としていた無理もないアリーナの遮断シールドを破壊して突然、乱入してきたのだから……。

一夏は、いつでも所属不明のISに攻撃を仕掛けられるように、ビームヘビィマシンガン、ビームソリッドショーター、ショルダーロケットを展開した。

『織斑くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐ先生たちがISで制圧にいきます！』

プライベートチャンネルで山田先生が一人呼びかけるが、一夏は山田先生の忠告を無視して全身装甲のISに攻撃をしかけた。

一夏は、空中からビームソリッドショーターで攻撃した、ある一定の距離を保ち攻撃を続ける、一夏は最初は様子を伺っていた理由は突然IS学園を襲撃してきたIS。

IS学園は世界から見てもISの保有数が多い場所であり生徒も、このような事態にそなえ戦える教員や生徒もいるはずである、そんなIS学園にISとはいえ襲撃してくるISに一夏は警戒しており、単機で攻めてきたのだから何か特別な装備をしていると一夏は考えていた。

高質力のビームに一夏はなかなか、とどめをさすきつかけがつかめずにいた。

(あのIISは何が目的だ？？？それに・・・)

アリーナの襲撃・・・何より目的。

(なぜ、今になつて襲撃する？IISの奪還が目的か・・・いやそれならIISを展開する前にIIS学園に潜入して俺や鈴をとらえて、奪うほうが田立たない、こんな襲撃は下手に周りに刺激をあたえるだけだ。)

一夏は犯人の目的を推測するが・・・

敵のビームの閃光が一夏の赤肩に襲う。

(・・・今は敵に集中だな)

一夏は敵IISに攻撃をかける。

しかし敵は攻撃に転ずると回避行動につづり次に無駄なくビーム兵器で攻撃してくる。

一連の動作に無駄がなかつた。まるで精密機械のよつに・・・

一夏と敵IISとの激しい銃撃戦が、空中で展開され一機とも円を描く動きで攻撃をしかけていた。

ドーン！！

突然、敵IISに攻撃が当たつた。

「…」いつの存在を忘れないでよ…」

鈴であった、鈴のISは一夏のバリア無効化攻撃で絶対防衛が働いたが、まだエネルギーが残っていたようだ。

鈴のおかげで隙ができたので一夏は攻勢に転じる。

一夏は、ビームソリッドシユータで敵の左腕と右足を撃ち貫き、そこからビームヘビィマシンガンのライフルモードで高速で接近しながら撃ち、赤肩の赤いビームの閃光が敵ISに流れ星のように降り注ぎ落ちてゆく、そこにショルダーロケットランチャーの残段の全てを振りそそがせミサイルの爆発音が響く。

敵ISは・・・損傷していたが、ギギギとうごいていた。

「あれだけ食らってまだ動けるのーー！」

鈴は愚痴る、しかし一夏は・・・
「・・・・終わりだ」

一夏はつぶやき、ビームヘビーマシンガンのライフルモードで容赦なく撃ち撃ち続けた。

あまりにも情け容赦がない攻撃に鈴は・・・

「一兄！それ以上・・・・」

いくらISの絶対防衛があるとはいえ、これ以上攻撃を加えるならIS操縦者の命が危ないと想い鈴は一夏を止めようとした。

しかし一夏は攻撃をやめる気配ない。

「一兄、やめ……ひー！」

一夏を止めるために近づいたが一夏の表情に鈴は恐怖した一夏は・・・・・無表情だったのだと目は冷たくまるで人形」のような目に鈴は恐怖したのだ。

そして動かなく、なつたエスティ・・・・・。

雪片一型を開いて全身装甲のエスティ・・・・・。

ズーンー！

叩きつけたのであった、鈴は・・・・・。

「・・・・・ズイハヂヤッタの一兄」

自分がしつてる鈍感だけどやさしい兄は、そこにはない・・・・・。鈴は変わりはてた一夏をみて敵の血を一滴残らず吸い取る吸血鬼だと鈴は思ってしまった。

こいつしてなぞのヒリ襲撃事件は一夏が敵を撃退したことにより解決した。

吸血鬼の戦い（後書き）

変わりはてた自分の兄、その思いに困惑する心、家族の絆は強くもうい。幼馴染の告白に一夏は、どう思つのか？

次回・・・告白。一夏の心は鈍い。

自分なりのボトムズの次回予告です、やつぱり初めてですからへたくそですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1361u/>

IS インフィニット・ストラatos ~異能者の一夏

2011年12月15日23時47分発行